

# 鬼灯の祭り

それは不思議な夏休みの出来事だつた。私は窓の外で鬼灯の提灯を持った口コンに出会つた。

——行こうよ

口コンはそう言つて私を誘つた。私は驚きながら口コンを見た。普通、ポケモンは喋らない。

でも、目の前にいる口コンは喋つてゐる。口コンはにこりと微笑み、去つて行こうとした。

私は待つてと/or>風に口コンについていつた。口コンは嬉しそうに私を見ていた。

口コンについて行くと、赤い鳥居が連なつた神社があつた。その時、ヒトカゲが現れた。

ヒトカゲは私に近づくと、口コンと同じ鬼灯の提灯をくれた。私はお礼を言いながら、鬼灯の提灯を貰つた。

口コンは早く来てと/or>風に私のパジャマの裾を引っ張つた。ふと、私は自分がパジャマのままで来たことに今さら気付いた。

でも、口コンが早く来てと/or>ふうに急かすので、戻るわけは行かず、口コンについて行くこととした。

長い鳥居を歩いて行き、頂上につくと、目の前に屋台がたくさんあつた。まだ夏祭りではないのに、もう祭りをやつていた。

楽しそうな祭囃子が聞こえ、楽しい気分だつた。神社に入ろうとすると、獅子と狛犬が鎮座する台の上にバシャーモとゴウカザルがいた。

バシャーモとゴウカザルは華麗に跳ね、舞うように拳と足を振り、まるで歓迎しているかのようだつた。

ふと、周りを見ると、全員ポケモンだつた。ポケモン達は私と口コンのようになに鬼灯の提灯を必ず持つていた。

神社に入ると、驚いたことに屋台をやつているのはポケモン達だつた。ポケモン達は私を奇妙に思わず、にこにこと見ていた。

私は不思議がりながらも、屋台を見ていた。良く見ると、すれ違う全員が炎タイプのポケモン達だらけだつた。

私は口コンと一緒に歩いていたら、マグマラシとヒノアラシの兄弟、冷静なポニータ、じやれてくるガーディと会い、楽しく祭りを満喫した。

すると、突然、真ん中にある大きな櫓の上にいる一匹のバクフーンが豪快に炎を出し、大太鼓を叩き始めた。

すると、口コンがまた私のパジヤマの裾を引っ張つた。私は何が始まるのだろうと思ひながら、口コンについて行つた。

始まつたのは、盆踊りだつた。音に合わせて炎のポケモン達が自分達の思うままに楽しく踊り始めた。

私は今まであつたガーディ、ポニータ、マグマラシとヒノアラシの兄弟、そしていつもそばにいた口コンと一緒に盆踊りをし始めた。

楽しかつた祭りはあつという間に終わつた。口コンは私を家に帰してくれた。

はつと目を覚ますと、いつの間にか自分はベッドにいた。そして、カーテンを開けると、眩しい太陽の光が差し込んだ。

私はぼつとしながらも、慌てて普段着に着替え、朝ご飯を食べずにあの神社があるだろう場所へと向かった。

だが、そこには赤い鳥居が連なつた神社はなかつた。

後から知つたことだが、あの口コンは車にひかれて私が看病した口コンだと母に教えられた。そして、あの祭りは鬼灯の祭りといい、炎のポケモン達の靈だけが集まる祭りだということも教えられた。

おそらく、あの口コンは看病をしてくれたお礼に誘つてくれたらしい。